

volume

2

【小説】もち
【イラスト】218

異世界魔術師は
魔法を唱えない

The another world's wizard does not chant.



試し読み版



C O N T E N T S

THE ANOTHER WORLD'S WIZARD DONE NOT CHANT

created by mochi and 218 - presented by kill time communication
beginning novels series



【第一章】囚われた聖女、真夜中の奪還劇

7

【第二章】王女の提案、聖女の試練

32

【第三章】難攻不落の砦、攻めるに苦せず

60

【第四章】聖女の痴態、復讐の始まり

94

【第五章】断罪の刃、聖女の陥落

126

【第六章】黒幕への制裁、万事憂いなきよう

149

【第七章】弟子への不審、忠義の裏切り者

183

【第八章】魔の手は侵食し、復讐を遂げ

208

【第九章】全てを裏切り、ただ主のために

245

【第十章】崩壊する帝都、新たなる敵

270

【番外編】聖女の独白、秘めたる心 297

ジーン超魔導帝国 魔術一覧 317

第一章 囚われた聖女、真夜中の奪還劇

このアンリエント王国では、並の貴族よりも教会の権威が強い。

それというのも、世界を作った神が眠っているという言い伝えのある霊峰がアンリエントの東部にあるのだが、この世界の人間は大体その神を信仰しているからだ。

おかげで国王ですら教会を意のままに従わせることはできず、結果として勇者である俺とフェリスに異端の罪を着せられても、おいそれと手出しができないのだ。

そもそも何故俺が異端かというと、俺が魔術師なのにエルフを妻に迎え入れようとしていると思われているのが理由らしい。

この世界の術式は神に祈る形で発動させており、実力があるほど信仰心の篤い人間と思われている。つまり強い術式を発動することができる魔術師は、それだけ敬虔けいけんな信徒であると見做みなされるのだ。

ただしそれは人間だけで、エルフなどの他種族はたとえ優秀な魔術師であろうとも、帰依した証がなければ神の信徒とは思われない。

レシアーナでもそうだったのだが、人間の国に所属していないエルフは基本的に独自の神や精霊を信仰している。

結果的に精霊を信仰しているエルフ達は人間から異教の徒として認識されているが、それ自体が

異端なわけではない。教会では本當の神を信仰できていない哀れな者達という見方をしている。

問題は異教徒と婚約をしていると思われた俺のほうだ。王国教会の教えでは異教徒と結婚するのは異端とされているので、エルフを好んで屋敷に迎え入れている噂のある俺は、教会から見れば限りなく異端者の疑いが高いというわけだ。

ちなみにフェアリスは俺という異端者と親密な仲であるという疑いが掛けられている。異端を庇うのもそれだけで罪になるからだ。

他の勇者達は保身のため俺とは関わらないようにしているが、それが賢明だろう。教会に睨まれるのは俺でも遠慮したいからな。

幸いにも現在俺は屋敷の庭にある隠し部屋に身を隠しているが、フェアリスは教会の連中に捕まっつてどこかに幽閉中だ。

ティアに聞いたところ、フェアリスが教会へと戻って司教に俺の面会について尋ねようとしたらしいが、待ち構えていたように教会の守衛達が彼女を捕らえたのだという。

フェアリスは信用できると言っていたが、この分だとフィルポット司教は敵側の人間だろう。「何か司教についての情報は分かったか？」

「ええ、あまり噂になるような人物ではありませんね。少々出世欲が強いとのことですが」「例えば俺とフェアリスを異端の罪で裁いたとして、奴の評価が上がるものなのか？」

「それはないでしょう。ご主人様が異端であると言い出したのは彼ではありませんし、既に審問官を退いていて、異端審問に関わる身でもないですから」

「そうなると厄介だな。上の命令なのか、他に繋がっている奴がいるのかは分からんが、相手の把握ができていないのは辛い……」

他に協力者がいる場合、トカゲの尻尾切りになる可能性があるため、司教に対処しても仕方がない。むしろ敵にこちらを捕捉されるかもしれないので迂闊うかつに動けない。

しかしなぜこのタイミングなのだろうか。俺を異端と糾弾するなら、それこそディアンのようにエルを連れてきたときに吊るし上げるのが普通だろう。

レシアーナとの同盟を組まれて困るのは現状魔帝国ぐらいだろうし、手柄を立てたことが憎いのならばアレクに難癖をつけるほうが先だ。

そして俺とフェアリスを陥れて得をする奴など、悪いが他に心当たりがない。ディアンやバークフィールドの復讐の線で考えるにしても、奴らの関係者で教会内部に手を回しているだけの余力がまだある者がいるとは思えないし、巷で聖女と呼ばれているフェアリスまで巻き込む必要性がない。

そうなると魔帝国という線が一番ありえそうだが、仮に司教が他国の間者と会っているなら、ティアが気付いているはずだ。一介の司教にティアの監視を掻い潜れるとも思えない。今は俺の屋敷でメイドをやっているが、これでも彼女は元々優秀な密偵だったのだ。

「そういうえば、屋敷の人間はどうしている？」

「特に変わりはありませんが、念のためエルマイア様とナタリア様はお部屋から出さないよう伝えておきました」

「そうか。まあこの屋敷にいる間は大丈夫だろうが、万が一のためには必要なことだ」

ナタリアはともかく、エルが教会の人間に捕まるとは思えないが、念のためだ。使用人は人質にもならないので捕まることもないだろうし、とりあえず屋敷の人間は大丈夫だろう。

後はフェアリスがどうなっているのかを知りたいのだが、彼女と連絡を取ろうにも、結界の中に閉じ込められているのか、彼女に渡した腕輪の場所すら認識できない。

エルの話し相手になってくれていた恩もあるし、何か手を出される前に助け出したいとは思っているのだが、こうなったら自分の足で捜しに行くしかないか。

「ご主人様、あの……」

教会に潜入する計画を立てていると、ティアが声を掛けてきた。どこか媚びるような声に何事かと彼女の顔を見ると、何かを期待するような表情をしていた。どうやらご褒美が欲しいようだ。

彼女を抱き寄せると抵抗なくこちらの胸に身体を預けてきた。レシアーナに行っている間は彼女に構うこともできなかったからな。夜には存分に可愛がるとして、今は口付けだけしてやった。

※

日も落ちてきたので、そろそろ行動を開始するか。光もほとんどない暗闇だが、一応保険に隠密ハイドを使い、気配察知や術式の探知にも引つかからないようにする。

フィルポット司教がいるという教会に上級転移アップグレードで行こうとしたが、教会自体に結界が張っており転移先に選べないので、近くまで跳んでから歩くことになった。

既に入りする人間も消えて辺りに人影もなく、教会までは榮々と近づくことができた。堅牢な石造りの建物がそびえ立っている様は、ちよつとした城のような威圧感を感じる。

近くから様子を窺っても見張りの人間は正門にいる程度だ。これなら見つかることもないだろう。教会に張り巡らされた結界も外からの術式を遮断する効果だったので、普通に通り抜けることができた。

中に入ると俺の魔力反応が感じられる。おそらくフェアリスに渡した腕輪の反応だろう。試しにフェアリスに念話を送ってみると、繋がった。どうやらここに閉じ込められているようだ。

（フェアリス殿、聞こえるか？ ヤード・ラス・ウエルナーだ）

（ヤード様ですか？ 済みません、貴方の無実を訴えようとしたのですが、私も捕まっちゃいました。お力になれなくて本当に申し訳ありません）

（気にするな。それより司教の居場所を知っていたら教えてくれ）

（司教様ですか？ おそらく自室に戻られていると思います）

（そうか、ではその自室の場所を教えてください）

曖昧な説明だが、何とか司教の部屋の場所を理解した俺は、フェアリスに礼を言っただけで話を切った。二階の端の部屋に司教がいる可能性が高いので、早速向かうことにする。

話をした限りではフェアリスにあまり取り乱した様子はないが、流石に参っているのだろう。彼女の言葉からは少し疲れたような雰囲気も漂っていた。少し急いでやることにしよう。

ときどき見回りに来る人間がいるぐらいとなっている教会内を進んでいく。中は思ったよりも入り組んでおり、たびたび行き止まりに当たってしまったが、物陰に隠れながら慎重に進み、目的の部屋までやってきた。少し扉を開けて中の様子を窺うと、四十代ほどの男がいるの見える。あれ

がフィルポットか。

奴は机に向かつて何やら作業をしている。こちらには気付いていないようなので、ギリギリ術式の効果範囲に入るよう身を乗り出して、窃思ソムニシングを使った。

(……まだ捕らえたばかりだから仕方ない。最悪既成事実さえ作ってしまえば、後はこちらのものなのだ。それよりも今はあの男をどうやって捕らえるか……)

思考を読んだところ、また物騒なことを思っているのが分かった。あの男とはおそらく俺のことだろう。記憶閲覧メモリーリサーチを使うには少々距離が遠すぎるし、これ以上近づけば奴の視界の端に入ってしまうかもしれないので仕方がない。一度扉を閉め、再びフェアリスに念話を送る。

(フェアリス殿、一つ質問があるのだが。司教と何を話した?)

(あの話ですか……無実を証明するための手段を教えてもらっただけです)

(ふむ、何かの取引か?)

(いえ、異端者と親密でないことを証明するために、教会関係者、つまり司教様と婚姻を結んではどうかという話でした。敬虔な人間同士で婚姻を結べば、異端の疑いは晴らされるだろう、と)

まさかの話に頭痛がする。まさか今回の件、そんな下らない理由で起こしたのか。

あのディアンですらまともに見えてくるほどの愚かさだな。なぜこんな下らない事件に巻き込まれなくてはいけないのだ。結婚したいなら勝手に告白でもしておけばいいだろう。

(……それで、そちらはその提案を呑んだのか?)

(まさか。異端の疑いを晴らすために婚姻を結ぶなど、そんな破廉恥なことではできません)

(まあそうだろうな。だがあの司教はそちらを諦めてはいないようだぞ?)

(そうなのですか……はあ……)

フェアリスは念話越しでも分かるほどに疲れた様子だ。まあ確かに年齢的に倍はある相手が結婚を申し込んだきたら、お互い好き合つてでもない限りは気持ち悪いだけだろう。それに司教の提案には下心が透けて見えている、というか下心しかなさそうだ。

早いところ彼女を逃がしてやったほうがいいのではないかと思うが、彼女のいる部屋が分からない。結界の影響か、彼女に渡した腕輪の魔力反応は分かるのだが、正確な位置が定まらない。

このまま辺りを探し回っても教会の人間に見つかる可能性のほうが高そうだ。ひとまず外に出て作戦を練り直そうかと思つたとき、司教の部屋から誰かが出てくる音が聞こえた。

慌てて念話を切つて廊下の角に隠れると、中から司教が出てきた。不審者のように周りを窺いながら向かった先は大體腕輪の反応があつた方向だ。おそらくフェアリスのところに行くのだろう。

夜に婦女子の部屋へ向かつていることと先ほどの思考から考えて、何となく司教の目的が察せしてしまう。流石にこの状況でフェアリスを見捨てるのは忍びない。幸い奴も人目につかないよう移動しているようだし、彼女の場所を探す手間も省けるので、司教の後ろを付いていくことにした。

しかし教会内にはあまり遮蔽物がなく、隠れながら付いていくのが精一杯で、司教を見失つたほんの僅かなうちに奴の姿が消えていた。相変わらず辺りに人影はなく、入れそうな部屋も遮蔽物もない。転移でもされたのでなければ、おそらく隠し部屋があるはずだ。そこにフェアリスもいるだろう。

試しに彼女に念話を送ってみたが、全く反応がない。念話に反応できないのは睡眠中か意識が別のものに向いていたり集中したりしている場合、もしくは意識が混乱しているときだ。

中で何をしているのかは分からないが、おそらくフェアリスにとつてあまりよろしくないことが起きていないに違いない。そう思ったとき、微かに悲鳴のような声が聞こえた。

声が聞こえた方向の壁を調べてみるが、一見しても普通の壁にしか見えない。一応叩いたり押してみたりしたが、反応がないのでお手上げだ。

「……か、誰か助けて下さい！ ヤード様あ！」

今度ははっきりと声が聞こえた。間違はなくフェアリスの声で、声には全く余裕がなく、今にも襲われそうな雰囲気を感じられる。もう隠し扉を探している時間もないようなので、最終手段を使うことにした。

手早く魔法陣を二つ描き上げ、まずは壁に向けて分解ディステンションカウレイトを放つ。一瞬で分厚い壁が塵と化し、その奥に隠されていた部屋が現れた。

何かの結界が張つてあるその部屋には、服を破られて今まさに襲われている最中のフェアリスと、半裸で彼女を組み敷いて、彼女の秘部に自らの物を押し付けている変態じみた姿の司教がいた。

まさか本当に俺が現れるとは思ってもいかなかっただろう。二人ともいきなり壁が消えたので驚きのあまり固まっている。襲われているフェアリスには悪いが、かなり間抜けな光景だ。

ともあれ隙だらけの司教に向かつてもう一つの魔法陣を起動する。窒息チックが発動して無酸素状態となった司教は、一瞬で意識を手放した。

恐怖でもよかつたのだが、一応この部屋の結界が精神感応系を遮断する可能性を考慮したのだ。ただこの術式は脳に後遺症が残る可能性がある。まあこんなことをするような奴には、もしそうなったとしても罪悪感はないのだが。

フェアリスの上に倒れこんだ司教を蹴飛ばして彼女の上から退かせると、破られた服の隙間から彼女の白い素肌が目に入った。

いつもは体型の分かりにくい服装だが、意外とモデル体型といったらいいのか、身長は高いが胸はそれほどでもない。それでも胸は人並みにはあるのだが、俺の周りの女性は胸が大きい者が多いので、相対的に貧相なものに見えてしまう。

少しの間彼女の身体を観察していたのだが、あまりの出来事に理解が追いついていないのか、彼女は俺の視線を気にすることもなくただ蹴り飛ばされた司教と俺の顔を呆然とした表情で眺めているだけだ。

一通り彼女の身体を眺めた後、彼女に着せる服を探してみるが、本当に何もなし部屋だったようで当然彼女の替えの服もなさそうだ。

仕方ないのでまだ呆然としているフェアリスに俺のローブを掛けてやると、自分が助かったことによく理解が追いついたのか、涙を流し始めた。

「や、ヤード様、ありがとうございます……」

「礼は後でしろ。誰かが来る前に急いでここを離れるぞ」

「は、はいっ」

見張りに見つからないように彼女にも隠密ハイドを掛け、司教エクストラクトメモリーに記憶抽出を使ってここでの出来事を抜き出した。これで俺が下手人だとは分からなくなった。

フェアリスの手を取り急いで脱出する。分解した壁は修復リペアで見た目だけでも戻しておく。壁が分厚いので完全には直せないが、見た目は全く違和感がないので誤魔化しは効くだろう。

帰日も誰かに見つかるようなことはなく、教会全体に張ってあった結界の範囲外まで逃げ、その後グレートイアレギートに上級転移で屋敷まで戻った。

※

フェアリスを教会から脱出させることには成功したが、まだこの件は何も解決していないため、このまま彼女を家に帰らせるわけにはいかない。ひとまず隠れる場所として地下の隠し部屋に連れてきた。ここならば見つかる可能性はかなり低いだろう。

「ヤード様、ここはどこでしょうか？」

「私の屋敷内にある隠れ家だ。ここならば教会の眼も届かないだろう」

「なるほど。魔道具もたくさん置いてあるみたいだし、いざというときに備えていたのですね」

フェアリスはそう言うと言珍しそうに部屋の中を見回した。確かに昼間のような明るさになるほどには照明が設置してあるが、これだけでも普通はありえないほどの金額になる。実際は全て自作なので魔石以外の材料費だけなのだかな。

「フェアリス殿、悪いがほとぼりが冷めるまで貴女にはここに隠れていてもらう」

「はい、大丈夫です。教会に私達の誤解を解いてもらうまでは仕方ありませんからね」

「さらに残念な知らせだが、隠れ家はこしかない。つまり私と相部屋となるが、構わないか？」
「え？ あ、そうですよね……だ、大丈夫、です……」

俺の言葉が予想外だと言わんばかりの反応を返してきた。少しも大丈夫そうな声色ではなかったが、ここに隠れてもらうのが安全なので気付かなかったことにしておく。

「まあ今日は疲れただろう。細かい話はまた明日することにして、今日のところは寝るといい」

「あ、はい。ではそうさせてもらいます」

もしものときのために用意しておいた簡易ベッドを出すと、フェアリスはそこで横になった。俺が一緒の部屋にいるのだが、先ほどの反応からして本当に寝つけるのか気になるところだ。

※

俺が戻ってきたことにどうやって気付いたのかは知らないが、フェアリスが横になってしばらくした後、隠し戸を開けてティアが入ってきた。

「お帰りなさいませ、ご主人様。フェアリス様もご一緒でしたか」

「ああ、教会から彼女を匿おうと思っている。食事は一人分多めに用意しておいてくれ。ああ、それと彼女に替えの服と毛布を持ってきてくれないか？」

「分かりました」

すぐに替えの服と毛布を持ってきてくれたので、とりあえずフェアリスの近くに服を置き、毛布を掛けておく。彼女は既に寝ているのか、目が覚める気配はない。何と寝つきがいいことだ。

彼女の頬を突いてみると少し顔を顰めたが、目が覚めることはなかった。先ほどの警戒心は何だ

ったのか、無防備に寝ている様子を見てみると、こちらも少しムラムラとした感情が出てきた。

いつもは特に何も感じていないが、フェアリスもそれなりにいい女だ。あの司教が策を弄しても襲いたくなる程度的美貌と身体は持っている。

興奮してきたので、まだ帰っていなかったティアをベッドへと押し倒す。彼女も期待していたのか、フェアリスが寝ているというのに抵抗もしない。

「昼間の褒美がまだだったな。今すぐ始めてもいいが、そこで寝ている奴が起きてしまうかもしれない。場所を移したほうがいいか？」

「いえ、ここで構いません。どうか私にご主人様のお情けを下さいませ」

ティアも意外と大胆というか、露出狂の気でもあるのだろうか。まあ場所を移さなくてもいいとのことなので、早速ここで始めさせてもらうことにする。

俺の褒美に期待する彼女を押し倒したまま、彼女の唇を奪う。手首を押さえて押し掛かったこの体勢は、無理やり犯しているかのような気分になって雄の本能が刺激されるな。

元々胸の谷間を強調するようなデザインだった服は倒れた際に少し乱れて淫靡な雰囲気醸し出しており、期待に潤んだ彼女の瞳と相まって非常に魅力的に感じた。

胸の頂いただきを触ってみると既に彼女の乳首も立っていたので、そのまま乳首を摘んで引っ張ってみる。「あっ、ご主人様、そんなに引っ張っては、んんっ」

「そうは言っても、お前のこはもつと弄って欲しいようだぞ？」

「お望みのままにっ、あんっ！」

許可が出たので彼女の胸を片側だけ出してぴんと立っている乳首を甘噛みしてやると、ティアは媚びたような甘い喘ぎ声を出して身じろぎした。

それにしても彼女の胸は大きい。周りの女性と比べても並ぶ者がいないほどだ。このまま乳首に吸い付いたら母乳が出てもおかしくはないな。

「あ、ご主人様、吸っては、あつ、ああああんっ！」

有言実行ということだ。甘噛みの状態からそのまま乳首に吸い付いてみたが、流石に母乳は出ない。口では嫌がつているような感じだが、ティアは無意識に俺の頭を押さえてきたので遠慮なく顔を押し付ける。胸に顔を埋めると、彼女の身体から甘い匂いがした。そのまま彼女の豊かな双丘を服の上から揉みしだく。服越しでも分かる柔らかな感触を味わっていると、彼女が俺の手を取った。

「ご主人様、こども……」

彼女は俺の手を自分の秘部へと導き、物欲しそうな目で見つめてきた。スカートの中に手を入れてみると、下着は既に湿っており、彼女が興奮していることが分かった。

「もう濡らしているとは、そんなに私の物が欲しかったのか」

「はい、ご主人様の物で貫いて欲しいです……」

甘えるような声で言ってくるので、当然その言葉に答えてやる。足を持ち上げ、彼女の下着を脱がせると、俺もズボンと下着を脱いで、肉棒を取り出す。これだけ濡れていれば大丈夫だ。

そのまま正常位で彼女の膣穴に肉棒を当てて貫こうとしたところで、ふと視線を感じフェアリスのほうを見ると、こっそりとこちらに視線を送っている彼女の姿が見えた。

俺が顔を向けた途端に視線を逸らして眠った振りを続けてはいるが、残念ながら全てばれている。男に免疫がないのかと思っていたが、性的な行為への興味はあつたようだ。

彼女のことから、俺達を見たら止めに入るか叫ぶか、どちらかだと思っていたのだが、面白い展開になってきた。

「ティア、入れて欲しかったら精一杯いやらしく誘ってみろ。フェアリスに見せつけるようにな」
「はい、ご主人様の熱く滾たぎっているその肉棒で、私のいやらしい雌穴を突いて、ご主人様の肉棒が欲しくて火照った膣内を掻き回して下さい……」

フェアリスが実は起きていることに気付いていないティアは彼女に見えるように手で割れ目を広げ、膣の中まで見えるようにして俺を誘ってきた。一瞬だがフェアリスの身体が跳ねたので、おそらく彼女もティアの痴態を確認したはずだ。

「よし、いいだろう。お待ちかねの物だ、存分に味わってくれ」

自ら広げたティアの膣内を一気に貫くと、期待していた物が入ってきた彼女の中は一斉に俺の物を絶妙な力加減で締め付けた。快感で声が漏れそうになったのを寸前で堪えたようだが、声は出してもらったほうが面白いことになるだろう。

「どうした？ 声は抑えなくてもいいぞ？」

「は、はいっ、んんっ！」

俺の言葉には素直に頷いたが、今も口を閉じて必死に声を押し殺している。自分からここですると決めていたが、まだ羞恥心でもあるのだろうか。このままでもティアは満足するだろうか、それ

では俺が面白くない。折角観客がいるのだから、もう少しサービスしてもいいだろう。

「え、あのっ、ご主人様!？」

彼女を持ち上げ、結合部がフェアリスにもよく見えるようにして、下から彼女の膣穴を貫く。腰を打ち付けるたびに飛び散る愛液が寝ている彼女の顔に掛かるかもしれないほどの距離に、ティアも背徳的な快感を得ているのか、締め付けが強くなった。

淫靡な水音を立てながらもこちらの物を貪欲に啜え込んでくる彼女の様子を、フェアリスがちらちらと見ているのが分かる。寝た振りを続けているのはこちらにはまだばれていないつもりなのだろうが、顔が赤くなっているので一目瞭然だ。幸いにもティアは行為に夢中でフェアリスのことは気付いていないようなので、もう少し楽しめそうだ。

「ほら、自分が今どうなっているのか説明してみろ」

「ご、ご主人様の物でっ、私の中が突き上げられています、んんっ」

「ちゃんと声を出せ。喘ぎ声も出していないぞ」

「申し訳ありませんっ、ああっ！ それいいですっ、子宮がガンガン突き上げられてえっ!」

腰を掴んで深く刺さるように押し込んでやると、とうとう我慢の限界が訪れたのか声を上げて喘ぎ始めた。こちらを向いて舌を伸ばしてきたので、俺も舌を伸ばして彼女と舌を絡ませる。もちろん腰を動かすのを止めたりはしない。

「そうか、これがいいのか。ならばもっと突いてやろう」

「あうんっ！ ありがとっ、ございますっ！ ああ、奥まで来よう！」

肉がぶつかり合いパンパンと小気味のいい音を鳴らしながら、激しく腰を振ってお互いに快楽を味わう。膣内は俺の肉棒をいい具合に締め付け、こちらの射精感を煽ってくる。

久しぶりの彼女の肉体はとても刺激的で、俺もすぐに絶頂の瞬間が近づいてくるのが分かった。

「くっ、ティア、そろそろ出すぞ！」

「はいっ、私の子宮につ、熱い精液をたっぷり注ぎこんで下さい！」

「だ、出すぞ、くうっ！」

「あああああっ！ ご主人様が入ってきてますう！」

ティアの腰を押し付けて、膣内に精液を注ぎこむ。彼女の中は俺の物を全て搾り取るかのように蠢き、いつも以上に大量の精液が吐き出された気がする。

たっぷり彼女の中に出し終わって肉棒を抜くと、ティアはすぐに俺の物を口に咥え、残った精液を吸い出し、いやらしく音を立てながら掃除をしてくれた。

フェアリスの様子を窺うと、顔を背けながらもまだ頬が赤くなっている。どうやら彼女にも楽しんでもらえたようだ。これで終わるわけがない。彼女が寝た振りを止める気配がなかったので、二回戦を始めることにした。

※

寝ているフェアリスを跨いで膝立ちとなり、ティアは俺の物を口に咥えようとしている。

「あの、本当にここでするんですか……？」

「そうだが、何か不満か？」



「流石にフェアリス様が起きてしまう気がするのですが……」

「大丈夫だ。彼女は起きないようにしておいた」

「そうですか、では始めさせてもらいます……」

ティアは俺の言葉に安心して、俺の肉棒を咥えて奉仕を始めた。

フェアリスには特に何もしてはいないが、先ほどの行為でも忌避するような仕草を見せなかつた彼女の事だ。こうやって大胆な行動に出たところで起き上がれるような度胸はないだろう。

「んう……ちゅ……」

ティアは一度射精して少し萎えてしまった俺の物に熱心に舌を這わせてくる。それと同時に勝手に溢れ出してくる唾液が少しばかり口の端から垂れ落ち、フェアリスの顔に当たっている。僅かに顔を顰めているが、やはり目を開ける気はないらしい。

ティアはいつフェアリスが目覚ますか分からないスリルと寝ている彼女に痴態を見せ付けている背徳感で興奮しているのか、奉仕にもいつも以上に熱が入っている。そんな彼女の奉仕に、先ほど出したばかりの肉棒も再び硬さを取り戻してきた。

「……ぶあ、また硬くなりましたね」

「ああ、そろそろいいだろう」

俺の物から口を離させ、横になっているフェアリスと向かい合うような形で四つん這いにさせる。これほど近くに顔を寄せればティアも彼女の狸寝入りに気付くかもしれないが、それはそれで面白い展開となるだろう。

先ほどしたばかりの彼女の股間は自らの愛液と俺の精液でベトベトになっていてるため、もう濡らす必要はない。それを彼女も分かっているのか、こちらに尻を突き出して俺を誘っていた。

「いくぞ」

「はい、ん、んんっ……」

先ほどと違い、今度はゆつくりとティアの雌穴に肉棒を埋めていく。二回目なので中は先ほどよりも熱くなっているが、俺の物を締め付けている膣の具合は変わっていない。

目の前でフェアリスが寝ているため、口を固く閉じて声を漏らさないようにしている。声を出すことができないためにいつもより敏感になっているようで、彼女の肌をそつと撫でるだけでも身体をビクビクと跳ねさせている。

そんな彼女だが中の具合は先ほどよりもよくなっており、フェアリスに見せ付けているという背徳感も手伝って、二回目だというのに俺の物は既に限界に近くなってしまっている。

「ティア、今の自分の姿を言葉にしろ！ もちろんフェアリスに分かるようになる！」

「私っ、はあっ、ご主人様のオチ○ポが、中でっ！ 奥まで届いていまっ、すう！」

「フェアリスにも見られているぞっ！ どうだ、今の気分はっ！」

「気持ちいいです！ 見られてっ、見られていると思うと、こ、興奮しちゃいます、は、あああん！」
とうとう我慢できなくなったか、再び声を出して喘ぎ始めたティアに満足しながら、俺もそろそろ限界だったので、腰を振るペースを速めた。

それと同時に、位置を調整する振りをしてフェアリスの股間を膝で押してみたところ、一瞬だけ

だが股を閉じようと足が動いた。ただそれ以上抵抗がなかったので、ティアを犯しながらフェアリスの秘部も同時に刺激し続けた。

「くっ、そろそろ俺は限界だ！ また中に出すぞ、ティア！」

「はい！ 私の膣内にご主人様の熱い精液、いっぱい注ぎこんで下さい！」

「ああ、イクぞ！ フェアリスに中出しされるところを見られながらイっつてしまえ！」

「見られながら、い、イキます！ あああアアアアッ！」

射精する瞬間に強めにフェアリスの股間を圧迫し、そのままティアの膣内に精液を注ぎこんだ。

ティアは背を反らしながら絶頂し、愛液がフェアリスの上にぼたぼたと垂れていた。そしてフェアリスも何とか声を出さずに済んだようだが、物足りなさ気に太股を擦り合わせていた。

ティアの中から肉棒を抜き、倒れこみそうになっていた彼女を支えて立ち上がらせ、彼女の服装を正してやる。いつもはこのまま俺と一緒に寝ているところだが、流石にフェアリスがいる手前、そんなことはできないからな。

「ではご主人様、これで失礼致します」

ティアは絶頂の余韻が落ち着いた後、いつもと変わらない冷静な表情に戻っていた。一見すると情事後だとは分からないほどの変わりようは流石としか言いようがないな。

ティアと二回やった後、彼女は屋敷のほうへと戻っていった。この部屋に残っているのは俺と寝たフリを続けているフェアリスだけだ。ティアが出ていっても起き上がる気配がないので、彼女は最後まで俺達の情事に気付かなかったということにしたいらしい。

まあ文句を言われるよりはいいので、俺も彼女のことは放っておいて寝ることにした。

※

そろそろ意識が遠のいてきたとき、フェアリスがもぞもぞと動いている気配がしたので、気付かれないようにフェアリスのほうをそつと窺うと、彼女は何やららごそと動いていた。

寝相が悪いのかと思つたが、何やら粘着質な水音がする。改めて彼女を見ると、少しばかり息が荒くなつており、頬も赤く染まつている。どうやら自慰をしているようだ。俺とティアの情事に当てられたのか、まさかそこまでするような奴だとは思わなかつた。

真面目な神官であつた彼女も、やはり健康な若い女ということか。普段は真面目で清楚な人物なのでそういつたことが想像しにくいのが、知らず知らずのうちに身体を持って余しても無理はない。

「……………んう……………」

何か小声で呟いている気もするが、ここからだと言き取れない。これ以上彼女の自慰を見ていても仕方がないので、さつさと寝ることにする。

「んっ……………あう……………」

少し声が大きくなつて、動きを止めた。どうやらいつたようだ。毛布を整えて、彼女も眠りの態勢に入った。結局最後まで聞いてしまったが、俺も早く寝ることにしよう。

※

目が覚めると、既にフェアリスも起きていた。普段の神官服のような服ではなく、ティアに持つてこさせた服に着替えているので、いつもと印象が違つた。

彼女は自分の寝ていた場所を見ながらため息を吐いていた。いい年をしておいて、何か粗相でもしたのだろうか。俺の視線に気付いた彼女は慌てて毛布を上掛け、ぎこちない笑みを浮かべながらこちらのほうを向いた。

「お、おはようございます、ヤード様。いい天気ですね」

「こんな地下では、今が朝かどうかすら分からないと思うが」

「そ、そうですね。え、えつと……」

「……とりあえず異端の疑いを晴らす方法について話がしたいのだが」

「あ、そういえば、昨日は危ないところを助けていただいてありがとうございます」

「昨日のことは気にするな、司教を調べに行つたついでだ」

「そうですね、昨日のこと……」

そこまで言つたフェアリスは、突然顔を赤くして黙ってしまった。大方昨日の夜のことを思い出してしまったのだろうか、あれは寝た振りをして誤魔化すつもりではなかったのか。

「や、ヤード様。昨日の夜なのですが」

「ああ、フェアリス殿は先に寝てしまったな。特に何もしていないから安心するといい」

「え？ あ、はい……分かりました……」

何か言われる前に先手を打つたところ、二の句を継げなくなったようだ。まさか彼女に自分から起きて見ていましたなんて言わせるわけにもいかなないので、昨日のことは無理やりなかつたことにさせる。彼女も何か言いたそうにしているが、ここでこの話は終わりだ。

それよりも今は教会の件だ。とりあえず彼女が何か知っているか確かめるために、昨日司教から読み取った考えを彼女に教える。だが彼女は何も知らなかったようで、力なく首を振った。

司教の目的が彼女だということは分かったが、俺を捕らえるほうにも力を入れていとなると、他にも何か目的があるのだろうか。

しまったな、あそこで急がずにその辺りの記憶も抜いてくればよかった。あのときは焦っていたので、そんなことにまで気が回らなかった。

「あの、済みません……」

「ん？ どうした？」

彼女が声を掛けてきたので、一時思考を中断して彼女のほうを見た。もじもじと股を擦り合わせているのを見て、すぐに事情を察した。

「用を足すならあそこでしてくれ」

俺が指差した方向には、風呂場に付いているのと同じ穴がある。穴の繋がっているところも一緒だ。一応仕切りも付いているが、元々一人で隠れるように作った場所なので、音を遮れるほどの効果はないだろう。

当然ながら彼女も聞かれるのは嫌に決まっているので、困った顔でこちらを見てくる。仕方ないのでティアを呼ぶことにした。

念話で呼び出すとすぐに駆けつけた彼女に、フェアリスを風呂の隣に設置してあるトイレに連れて行くよう頼む。この地下室から脱衣所のほうには直通で行けるようにしたので、そちらでも

らえばいい。ついでに風呂で身体を洗ってやるように伝えておいた。

彼女達が風呂に行ったのを見て、こちらも出した寝具を片付けることにした。毛布を剥ぎ取ると、ベッドにシミができていた。昨日の自慰のせいか。何とも言えない微妙な気分になったが、フェアリス達が風呂に行っている間に洗って乾かしておいた。

※

風呂から戻ってきたフェアリスは、自分の寝ていたベッドのシートが剥がされているのを見て、慌てた様子でこちらに近寄ってきた。

「や、ヤード様、私の寝ていたシートはどうしたのですか？」

「ああ、それなら片付けた。気にすることはない」

「うう……あ、ありがとうございます……」

羞恥で顔を真っ赤に染めてしやがみこんでしまったフェアリスを横目で見ながら、ティアがこちらに近寄ってきた。

「ご主人様、お手紙が届いております」

「誰からだ？」

「はい、ソフィア様からです」

ソフィアからの手紙か。封を切って手紙を読んでみる。今夜彼女の部屋に来て欲しいということが書いてあった。俺が屋敷にいるのは彼女も知らないはずなのだが、よく手紙を出そうと思ったな。ティアならば俺の居場所に届けてくれるとでも分かっていたのだろうか。

とりあえず今晚お邪魔することにしよう。もちろん正面からではなく、転移を使って直接入るのだが。それまでは暇なので、新術式の研究でもすることにした。

俺が作業している様子を興味深そうに見ているフェアリスだが、彼女の使う術式とは形式が違いすぎるので、全く理解できていないに違いない。

しばらくはこちらの作業を見ていたが、やがて傍を離れていった。そして元々の日課だったのか手持ち無沙汰だったのかは分からないが、神への祈りを始めた。

まあこの部屋でやることがないというのは分かるので、好きにさせておくことにした。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコウビル
TEL.03-3555-3431(販売) / FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。

本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。

また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>